

大野道夫インタビュー

インタビューアー 谷岡重紀

谷岡 まずはビールで乾杯をしてはじめていくと、大野さんは信綱のひ孫にあたるわけですね。

大野 そう、だから頼綱くん、定綱くんとは又従兄弟になるわけです。それで熱海の信綱に小学生の頃に母に連れられて会って、そのこの世ならぬ雰囲気に、純粋かつ単純な少年だったので、よし私も文学と学問をやろう、と思ったりしたわけです。

谷岡 高校まではこの近くに住んでいたんですね。

大野 県立の湘南高校へ通っていて、生徒会、新聞部、弁論部などの部活をやっていました。そしたら横浜国大などの全共闘運動の落ち武者たちが高校へオルグにやって

来まして、やはり純粋かつ単純な青年だったので、これは社会科学をやらなければならぬ、と思い詰めてしまったわけです。

谷岡 そこでお母さんの従兄弟にあたる幸綱先生に進路相談に行ったら、文学はどんな学部でもやれると言われたので、文学志望ではなく東大に入学したわけですね。大学では何をしていたんですか？

大野 大学の授業がおもしろくなくて、読書会などをするサークルに入って、マルクス、ウエーバーを少しずつ読んでいました。

谷岡 ぼくも早稲田の哲学科に行って、マルクスの『経済学・哲学草稿』を読んだりしてました。ちょうどマルクスを経済学だけではなく、哲学として、個的疎外論として

読む、ということがおこっていて。

大野 そう、ちょうど初期マルクスが見直されてきましたよね。

それからマルクスにとつては資本主義を止揚する唯一の答えが社会主義だったわけですが、ウエーバーを読むと、それは近代化の一つのあり方である、と相対化できるわけです。結局マルクスの予想に反して先進国では革命が起こらずに議会制民主主義となり、日、独などの中進国はファシズム、そして後進国のソ連、中国などが社会主義になったわけですから。

谷岡 大学ではアマチュアレスリング部にも入ったんですね。

大野 はい、ずっと文化部をしていたので、